

## マナと靈質

阿部, 重夫

<https://doi.org/10.15017/2544321>

---

出版情報 : 哲學年報. 6/7, pp.177-199, 1948-06-05. 九州大学法文学部  
バージョン :  
権利関係 :

マ

ナ

と

靈

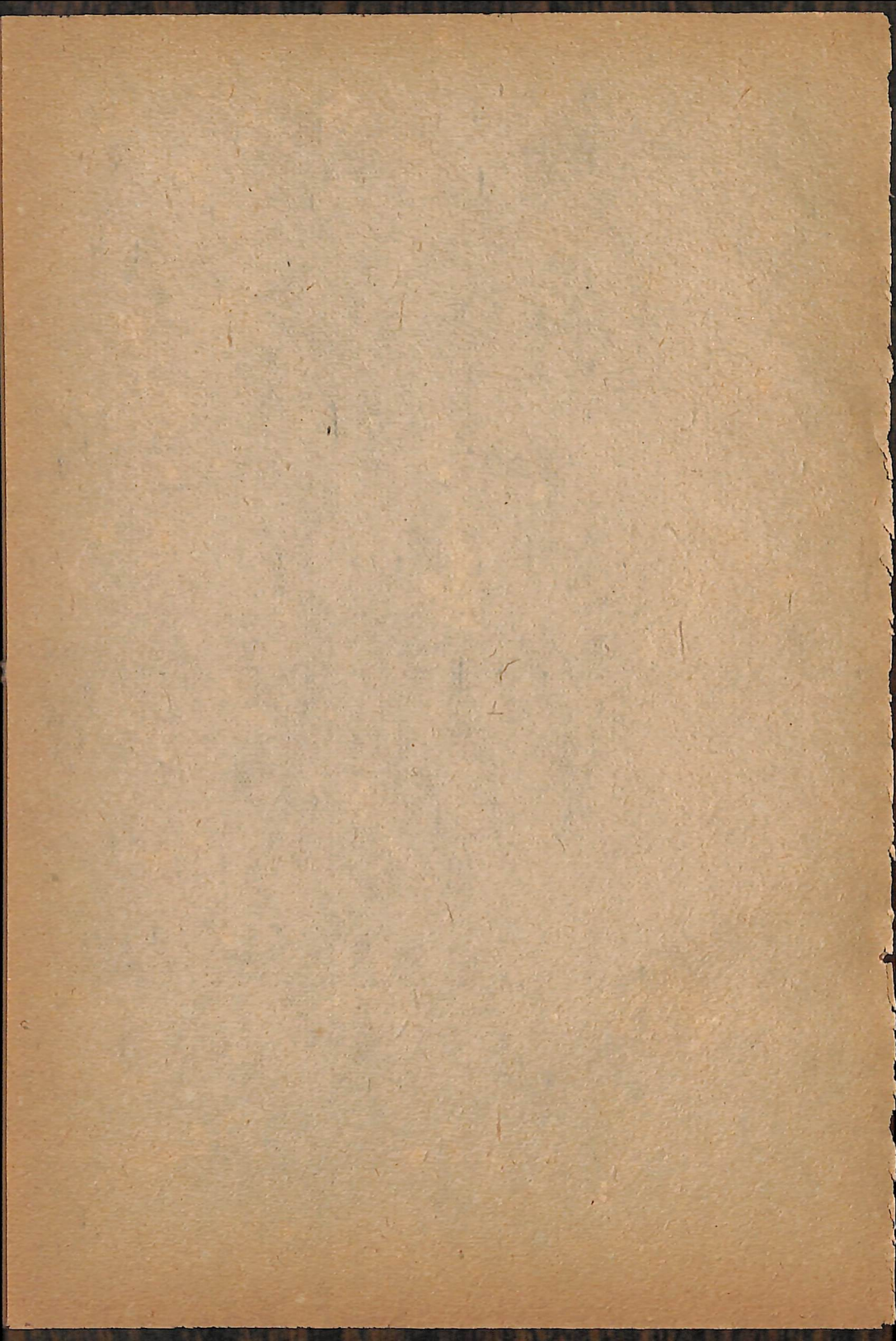
質

阿

部

重

夫



自由なる研究精神の下に

篤き指導を給へる

故佐野教授の御靈に

この小論を捧ぐ

一

英國の宣教師コドリントンがメラネシア人に就いて報じたマナ mana がマクス・ミュラーによつて始めて宗教學界に採上げられるや、爾來この觀念は數多の學者の注目を惹き、人類の最も原始的、基本的な宗教觀念を表はすものと見做されるに至つた。そしてこれは廣く他の未開世界に於ても指摘せられるやうになつた諸多の類似觀念の考察と相俟つて宗教學に廣汎にして深甚な影響を及ぼした。マナは實に他の如何なる原始的宗教觀念にも劣らず宗教學上の流行語となり、それは原始的宗教現象の有力な説明原理として廣く承認されるやうになつた。

しかしながら多くのマナの理論的研究者達の主たる興味は、マナをば他の諸類似觀念と共に併せ考察して、いはばマナ一般としてその學問的、普遍的意味を闡明しようとするにあつた。かゝる要求を充すためにはそこに概括作用が加へられるため、勢ひマナ及びその類似觀念夫々の地方的、個別的意味が多かれ少かれ無視されることゝもなつた。學問の要求上、その意圖は誤つてゐるとは云へず、その結果についてもある程度止むを得ぬものであることは吾々もマレットと共に認めるものである。けれどもそれには自ら限界があることであり、又一概に類似觀念と

云つても、夫等は何れも多かれ少かれ異つた様相を呈してゐるのであるから、それ等を概括して普遍の意味を見出すことは嚴密には困難であり、それだけに慎重を期さねばならない。しかるに實際に諸説に就いて見れば、何を中心にして概括するかは見る人によつて異り、その間に又地方的意味が不當に無視されたり歪められたりしたこともないではない。このやうにしてマナの觀念内容に就いては人によりかなり大きな相違を示してゐる。

これをメラネシアのマナに就いて見ると、これまでマナの理論的研究者達の大多數は殆ど専らコドリントンの報道に基いて説をなしてゐる。それにも拘らず、學問的使用に役立つ場合、コドリントンの報じたマナに關する諸家の解釋は必ずしも一樣のものを示してゐない。コドリントンはマナを超自然的力として報じたが、それが非人格的かそれとも人格的か、或はマナは一の實體と見るべきかそれとも諸存在の屬性と見るべきかは説の分れるところである。又人々はコドリントンの報道に基きながらもコドリントンの見るところを離れて、マナを以て或は宇宙に遍滿する力、非感性的力乃至は普遍的呪力、普遍的生命力等様々に解釋してゐる。

かゝる問題は獨りメラネシアのマナに限らず、なほ他の類似觀念に於てもある。抑々これまでマナの類似觀念として指摘されたものの中には、例へばクキンスタンドのカビ族のマングル *mangur* の如く、果してメラネシアのマナと同一範疇に屬せしめてよいかどうか疑問のものさへある。かゝる事情であるから、今日マナの研究は今一應問題の始めに立歸つてその地方的意味に再検討を加へる必要がある。既にマレットも云つてゐるやうに、マナの地方的意味は學問的意味と密接な關係を持つべきものであるから、今日更めてマナの正しい學問的意味を闡明するために、既存觀念を離れて、先づ人々が依據した資料を更に嚴密に検討すると共に、その後報せられた新たな現地

調査資料をも参照してマナの地方的意味を精確に把握しなければならぬ。この小論はかゝる意圖の下に試みられたものである。従来間々メラネシアのマナとインドネシアの靈質との關係を想定することが行はれてゐる。それでそれが果してさう見得るや否やを検討することによつて、この方面からメラネシアのマナが示してゐる様相を窺はうとするに外ならぬ。

(一) Marett, R. R. : The Threshold of Religion, 2ed. 1914, p. 99.

(二) Söderblom, N. : Das Werden des Gottesglaubens, 2 Aufl. 1923, s. 8.

(三) Codrington, R. H. : The Melanesians, Studies in their Anthropology and Folk-lore, 1891, p. 118.

(四) Marett, R. R. : Mana, in ERE., vol. 8, p. 375.

## 二

メラネシアのマナとインドネシアの靈質との關係を辿らうとすることは決して一般的に試みられてゐるのではない。しかし先づこの問題に觸れた者にフォックスがある。ソロモン群島の東南部に位するサン・クリストヴァル島を探究したフォックスは、その土着民のメナ *mena* (マナ) の信念がインドネシアの靈質觀念と共通の諸点を有することに言及した。けれどもフォックスはインドネシア人の靈質觀念に就いてペリーが語るところを聞えて、それがメナと幾らか共通点を有することを氣付いたに止まり、その共通点が何であるかを具体的に指摘してゐない。しかしてフォックスの見解よりも更に進んでマナと靈質との關係を認めようとした者にリヴァーズとイヴェンスとがある。

リヴァーズはメラネシア諸島の靈魂觀念を検討して、それが有するところの、睡眠中に徘徊するとか、臨時に動物の姿に化身するとか、或はしばしば影と同一視されるとか云つた特性に於てインドネシアの靈質の人格の様相の顯現を認めようとした。しかし彼によると靈質のいま一面である非人格の様相はメラネシアでは明かでない。インドネシアでは靈質が現在することによつて説明されてゐる共感呪術、醫藥として唾液を吐きかけること、人肉嗜食、首狩その他の慣習はメラネシアに於ても廣く行はれてゐるけれども、しかし此處ではこれらの慣習が靈質の非人格的原理に基くことの暗示を與へるものは何處にもない。しかしメラネシアの一地方には恐らくインドネシアの靈質概念と關係のある重要な一組の信仰がある。バンクス諸島とトールス諸島では大抵の宗教的及び呪術的儀禮は石、葉、言葉若くはその他の儀禮の諸要素中に宿つてゐる力乃至勢力の信仰に基いてゐる。これらの事物はマナと呼ばれる勢力がよつて以てある存在若くは事物から他のものに傳へられるところの媒介物である。それは丁度インドネシアで、ある人物と接觸してゐた事物が媒介物になつて、それによつて當該人物の内なる靈質と呼ばれる靈的勢力が他のものに傳へられ得るが如くである。』と。

即ちリヴァーズはバンクス諸島とトールス諸島とのマナが非人格的であつて、一から他に傳へられ得るといふ特性を有することに於てインドネシアの非人格的靈質のメラネシアに於ける唯一の顯現を認め、この兩者を關係付けて見ようとしたのである。然らばその關係は果して如何と云ふに、吾々は彼の所論から十分な説明を期待することが出来ない。けれどもリヴァーズはポリネシアのマナをインドネシアの靈質の變じて成つたものと考へてをり、而してバンクス諸島に於ても、變化の過程はポリネシアの場合とは異つて、インドネシアの原型に一層近い形式に於

てマはあるが、矢張りかゝる變化が遂げられたものと見ようとしてゐる。<sup>(三)</sup>それは兎も角、叙上の如きリヴァアーズの想定にはなほインドネシアとメラネシアとが言語のみならず、一般文化に於て密接な關係があるとの見解が基礎をなしてゐると云ひ得るであらう。<sup>(四)</sup>

リヴァアーズの見解はやがてイヴェンスによつて大体踏襲された。しかしイヴェンスはリヴァアーズが擧げたトーレス諸島を除いて、その代りにサン・クリストヴァル島を擧げ、こゝとバンクス諸島中のモタ島とのマナに於てインドネシアの靈質との關係を認めようとした。その根據はリヴァアーズと略々同じいのであつて、インドネシア語を話す種族がメラネシアに移住したと見られること、サン・クリストヴァル島やモタ島のマナが非人格的であることがそれである。そしてこれらに基いてリヴァアーズよりも確信を以て、これらの地に於て見るマナの觀念がむしろインドネシアの靈質觀念の結果であると想定して大丈夫と思はれると主張した。<sup>(五)</sup>

- (一) Fox, C.E. : The Threshold of the Pacific, 1924, p. 234.
- (二) Rivers, W. H. R. : The Concept of "Soul-Substance" in New Guinea and Melanesia, in *Psychology and Ethnology*, 1926, pp. 111—114.
- (三) Rivers, : *ibid.*, pp. 114—115.
- (四) Rivers, : *ibid.*, p. 102.
- (五) Ivens, W. : The Diversity of Culture in Melanesia, in *Journal of the Royal Anthropological Institute*, vol. 64, 1934.



## 三

かくの如きリヴァアーズやイヴェンスの所説は決して精到なものと云ふことが出来ない。彼等が見るが如く、メラネシアの非人格的マナがインドネシアの靈質に由來するとか靈質の結果であるとか云ふことは、一の假説としては成立し得ても、それがどれ程の學的根據に基いてゐるかは甚だ疑はしい。それで吾々はリヴァアーズやイヴェンスの主張の根據を検討して彼等の見解が果して支持し得るか否かを明かにしよう。

先づリヴァアーズやイヴェンスの主張の根柢となつてゐるところのメラネシアとインドネシアとの密接な關係に就いては吾々も亦疑ふことが出来ない。一体今日のメラネシアは毫も單一な統一体を成してはゐない。住民、社會組織、言語、文化、慣習等の各般に亘つて複雑な様相を呈してゐる。それが過去の長い間、屢次に亘る諸々の外來要素の影響によることは殆ど動かし得ぬところであらう。そしてメラネシアに及んだ諸外來要素中インドネシアからものが大きな部分を占めることも疑ひ得ない。既にコドリントンはメラネシアにインドネシアから古くて斷續的な影響があつたことを認めてゐる。リヴァアーズ自身もマレー群島方面から彼が名付けて *Kava-people* と *Betar-people* の二つの主なる移民集團が相次いでメラネシアへ到來したものと考へた。それで細部の點に關しては人によりかなりの見解の相違があるにせよ、過去に於てインドネシア方面から移民集團のメラネシアへの到來が一再ならず行はれたことは他にも認められ、従つてその結果、この兩地域の間に言語や一般文化の上に密接な關係のあることは今日疑ふことが出来ない。

かくてリヴァアーズやイヴェンスの主張の根柢をなすところが承認されるにしても、しかもそれはそれのみを以てしては目下の問題にとつて何等有効ではなく、むしろそれは直接有力な他の證據を俟つて始めてその意義を持ち得るものたるに過ぎぬであらう。それ故吾々がリヴァアーズやイヴェンスの見解を支持し得るか否かについて検討すべき中心問題は他にある。即ち第一にマナと靈質とが共有するとなす非人格的で媒介物を通して一から他に傳はると云ふ特性が兩者を關係付ける上に果して主要な根據たり得るか否かと云ふことがそれである。而して兩觀念の關係は、思ふにその本質的特徴に基いて辿らるべきものであるから、今こゝに提起した問題は叙上の如き特性が果してマナや靈質の本質をなす特性か否かと云ふ問題に置換へることが出来るであらう。吾々はこの点を明かにし、併せてマナとの對照に便するため、こゝにインドネシア人の靈質觀念を、その主要な特徴に於て執へておく必要がある。

インドネシア人の靈質觀念に就いて權威ある報道をなしたクロイトによれば、インドネシア人は異つた二種の靈質觀念をもつてゐる。一はこの地上生活に於てのみ、他は來世に於てのみある役割を演ずる。後者は死と共に前者が去つた時に始めて人間から分離して獨立の生存を保ち、靈の國で人格的生存を營む。従つてこれは他民族間に普遍に認められる靈魂と同じいものと見得る。しかるに前者はこれとは大いに異つてゐる。それは個人感情がより發達してゐる所ではより人格的に表象されてゐるが、かゝる感情の余り發達してゐない所ではより非人格的に表象されてゐる。而してその重要な特徴は凡ゆる自然を生かす生命力と云ふ点にあるのであつて、クロイトはこれをば Zelfstof, Soul-Substance 即ち靈質と呼んで後者から區別した。

生ける人間に於て人格的に表象された靈質はその所有者の姿を持つてゐる。しかしインドネシア人はそれを親指大の矮小な人間の存在と常に想像してゐる。而してそれは影に体现し、又睡眠中任意に一時的に身体から分離して徘徊し得る。しかし又靈質は他人によつて身体から除去られ得る。何れの場合に於ても靈質の身体からの分離が余りに長いと、その者は病氣になつて死ぬと信じられてゐる。クロイトはかゝる人格的靈質は人間の中なる凡ゆる非人格的靈質を擬人化したものと見てゐる。

次に非人格的靈質に關するインドネシア人の信念によると、それは人体の凡ゆる部分に行き亘つてゐる。従つてそれは身体のだの部分からも扱取られ得る。就中靈質に富む部分は頭、腸、肝臟、胞衣、臍緒、頭髮、爪、齒等であり、血も多量の靈質を含む。これはなほ唾液、汗、涙、尿等身体の分泌物中に含まれ、更に汗に浸つた衣服も靈質を含むが、なほ靈質は人の影や氣息にも体现するとされる。かくてしばしば靈質を表はすに氣息を意味する語が用ゐられる。かゝる非人格的靈質はインドネシア人の考では増減し得る。それで彼等は自己の生命を一層強めるために己が靈質を増すことを努める。この目的のために食物を食べ、血を飲むことが行はれ、又人に新な靈質を供給するために、唾液を吐きかけたり、氣息を吹きかけたりすることが行はれる、靈質は又單なる接觸によつて人から人へと傳へられる。

しかしながらインドネシア人の考によれば、人間のみならず動植物や事物までも靈質を持つ。殊に動植物の靈質は人間のそれに似てゐる。それは一般には非人格的であるが、しかし犬、水牛、牛等、人間にとつて特に重要な動物や果實のなつてゐる樹、米、椰子樹等人間に大なる効用のある植物は人格的靈質を付與されてゐる。

死後靈質の運命に就いて特殊の例外はあるが、一般にはそれは靈魂とは區別されつゞける。一般の觀念は死後靈質は主神の許に歸り、この神が又もやそれを他の人間や動植物に配分するか、或はこの時生は直接行はれるとも信じられ、かくて輪廻信仰を惹起するのであるが、叙上の如き靈質觀念はインドネシア人の呪術宗教的信念や慣習の基底をなす重要な原理となつてゐるのである。

以上は大体に於てクロイトが長々と述べたところの要点をとつて吾々自身の文章に移したのであるが、これによつてインドネシアの靈質の主要な特徴を知ることが出来る。而して吾々が先きに提起した問題を、こゝに示された靈質の特徴に就いて見る場合、非人格的で容易に他に傳はり得ると云ふことは必ずしも靈質の本質をなす特性と云ふことは出来ない。非人格的靈質と云ふも、それは靈質の一樣相であり、存在の一形式たるに過ぎず、靈質は又人格的でもあり得るのである。その上傳播性を有することが成程靈質の一特徴をなしてゐるにもせよ、それは靈質にとつて主要な特徴でもなければ、靈質にのみ固有の特性でもない。タプーテロの觀念の如きも明かに傳播性を持つてゐる。吾々が叙上の説明に就いて知り得る靈質の靈質たる所以は、その様相は如何様にもあれ、それが生命力たる点にあると云へる。靈質は人間は固より動植物、事物に至るまでそれらを生かしてゐる原理と見られ、人の病氣や死が靈質の退去によつて説明され、或は病人や瀕死の者を健康にするため靈質の顯現なる氣息を吹きかけたりすることは靈質の本質が究竟生命力たる点にあつて、それが生命や健康と密接に關係してゐることを示すに外ならない。而して靈質のこの主要特徴に就いては、リヴァーズ自身も重要なものとして特にこれに注意を喚起してをり、人格的靈質は左程明瞭に生命力とは關係してゐないが、非人格的靈質は一種の生命原理乃至生命質と見られる

としてゐる。<sup>(2)</sup> しかればマナと靈質との關係は靈質のかゝる本質的特徴に於て辿らるべきものであつて、リヴァーズやイヴェンスが執へた如きは兩者を關係付ける上に決して有效な根據と云ふことは出來ない。<sup>(3)</sup>

(一) Codrington, : *ibid.*, p.1.

(二) Rivers, : *The History of Melanesian Society*, 1914, vol. 2, pp. 574, 577—578.

(三) Haddon, A. C. : *The Races of Man*, 1925, pp. 130—133.

Dixon, R.B. : *The Racial History of Man*, 1923, pp. 314—320.

Speiser, F. : *Melanesien und Indonesien*, *Zeitschrift für Ethnologie*, Bd. 70, 1938—9, ss. 43—181.

(四) Kruijt, A. C. : *Indonesians*, in *ERE*, vol. 7, 1914, pp. 282—288.

(五) Rivers, : *Psychology and Ethnology*, p. 100.

(六) リヴァーズやイヴェンスが云ふ意味での非人格性がマナの特性とし得るか否かは次節の論述で明かにされるであらう。

## 四

しかしながら甲地の觀念が乙地に移植されて、しかもその傳來が久しいやうな場合には、もとの觀念が様々に變容せられて明瞭に現はれてゐないこともあらう。それ故リヴァーズやイヴェンスが類似の一特徴に基いてマナと靈質とを關係付けようとしたことはある程度止むを得ぬこととして、然らば彼等が擧げた地域のマナは果して彼等が認めた如く、人格的存在とは無關係に、それ自体で石、葉、言葉等と關係すると云ふ意味に於て非人格的と見るべきであらうか。これが彼等の見解を批判する上の第二の中心問題である。それで以下資料に依據して少しくこの

点を考察して見よう。

吾々は先づ現地研究者と云ふことで遽かにリヴァーズやイヴェンスを信用することは出来ない。何となれば彼等の現地調査がマナに關して本格的に行はれたとは見難いからである。リヴァーズは一八九八年ハッドン統率下に組織されたケムブリッジ人類學探検隊に加はつて實地にトールス諸島の土着民の探究に携はつたけれども、この際彼の擔當は心理學的部門であつた。而して又一九〇八年にメラネシアへ遠征し、のち又重ねて同地を訪れたけれども、何れも極めてあわたましい訪問に終つてゐる。これに比べるとイヴェンスは久しくメラネシアに滞在して實地に觀察する多くの機會に恵まれてゐたけれども、彼の滞在地はソロモン群島の南マラとウラワとであつた。それ故彼はバンクス諸島やサン・クリストヴァルについては他人の報道に依らねばならなかつた。されば現地研究者と云つても、少くも本問題に關する限り、リヴァーズやイヴェンスの云ふところはかなり割引して見る必要がある。

のみならず吾々はリヴァーズやイヴェンスの叙上の見解を疑ひ得る他の根據を持つてゐる。吾々は兩者の見解が全般的には同趣旨のものではあつても、細部に關しては幾らか相違のあることに先づ注意を向けねばならない。即ちリヴァーズは非人格的マナの信念をバンクス諸島とトールス諸島とに局限して見てゐるが、イヴェンスはトールス諸島を擧げずに、新にサン・クリストヴァル島を加へてゐる。大体に於てリヴァーズに依つたと思はれるイヴェンスが特にトールス諸島を除いたについては、この諸島のマナが非人格的とし難いことを認めたがためと思はれるけれども、しかもその点イヴェンスが如何なる資料や根據に基いてゐるかは明かでない。抑々この点に關するリヴァーズの見解は彼の忙しいメラネシア訪問の間に集め得た資料に基いたものであらうか。それにしてもコドリント

ンはマナが一般的に死靈か精靈の人格的存在と密接に關係してゐるものと見てゐて、この点ベンクス諸島は固より、トールス諸島やサン・クリストヴァルが例外をなすものとは見てゐない。イヴェンスが擧げたサン・クリストヴァルもフォックスの報道に就いて見れば、イヴェンスがこゝに特に擧げるには適當のものでない。この地ではマナが宿つてゐて、自らマナの傳達物たり得るものはかなり多い。中でも死者と關係のある事物、殊に頭蓋骨、ある植物、珊瑚を焼いて得た灰、水、眞珠母、ある種の貝、石等が擧げられる。フォックスはこれらの凡てが人格的存在と關係してゐるとは直接明言してはゐないけれども、しかも頭蓋骨は固よりある木、石等はかゝる存在と關係してゐるものとして示されてゐる。

しかのみならず、この島民（殊にアロシー地區の）の信念は、祭司と一般人との間に幾らか相違はあるけれども、しかも何れにせよマナの根源は精靈か死靈かであつて、かゝる人格的存在からマナが物質的事物に與へられると云ふにある。それ故イヴェンスがサン・クリストヴァルのマナを他のソロモン群島一般のマナの信念とは異なるものとして、それをば人格的存在と關係ないものと見ようとする<sup>(10)</sup>ことは當を得てゐないと云はねばならない。

次にリヴァーズは非人格的マナをかつて人間のか靈的かのある人格から引出されたものとしてゐるのに對して、イヴェンスはこの点には一言も觸れてゐない。イヴェンスだけに就いて見れば、ベンクス諸島のモタではマナは徹頭徹尾人格的存在とは無關係のものとして示されてゐる。しかしながら彼は別の論文に於て、モタのヴィイ（精靈）を名のあるものと名のないものとに分ち、後者が石、場所、樹木、動物と結合してゐるとした。自然界のこれらの存在や事物が一方でヴィイと緊密な關係を保ちながら他方それらが又マナの媒介物であるとせば、土着民の信念

に於てそのマナが果してマナの持主なるヴイと無關係であり得るであらうか。

これに類似のことはリヴァーズに於ても認め得る。既に見た如く、リヴァーズはベンクス諸島でマナはかつてはある人格から引出されたものではあるが、しかも大いに非人格的であるとした。しかし他方彼の名著「メラネシア社會の歴史」に於ては、ベンクス諸島に於けるヴイと事物のマナとの密接な關係が明言されてゐる。即ち云ふ。ベンクス諸島の諸呪術儀禮には「ある種の靈的作用が關係してゐることは明かである。儀禮の効驗はある特殊の目的のためのマナ（乃至力）を持つてゐると信じられてゐるある石か他の事物の使用に依存する。そしてこのマナは明確にヴイ即ち精靈が現在してゐるといふ信仰と結付いてゐる。」と。なほ同書中にはベンクス諸島でヴイが石その他の無生物と關係してゐることの證據が所々に散見してゐる。これによつて見れば、リヴァーズがマナの媒介物になるとした事物が同時にヴイと關係してゐるものとされてゐるのであつて、従つて以前と云はず、今日でもベンクス諸島に於て事物に宿るマナを一概に非人格的と見ることは出來ぬであらう。

かくの如くリヴァーズの見解も前後相一致しないものを示してゐるが、その由つて來るところは今遽かに斷言し得ない。しかし吾々の見るところを以てせば、こゝで問題になつてゐるリヴァーズの見解はむしろコドリントンの報道に基いてゐると思はれる。即ちリヴァーズはコドリントンがマナはそれ自体は非人格的であるけれども、つねにそれを支配するある人格と結付いてゐると云つたことに基き、しかもコドリントンのこの見解がベンクス諸島のモタから得た資料に依つてゐると見るのに依ると思はれる。この点イヴュンスもリヴァーズに従つてゐるが、しかし彼等がかく見る根據が何であれ、又假令コドリントンの見解がモタから引出されたものであるとしても、コドリ



ントンは自身は決して自己の述べるところがベンクス諸島にのみ限られたものとはしてゐない。のみならずマナの非人格性に關するコドリントンの見解が果してリヴァーズやイヴェンスが解してゐるところと一致するかどうかは甚だ疑問である。それ故コドリントンに據つて特にベンクス諸島のマナを人格的存在とは無關係のものとするは妥當とは云へぬであらう。

- (一) Codrington, : *ibid.*, pp. 119—123.
  - (二) Fox, : *ibid.*, pp. 252—273.
  - (三) Fox, : *ibid.*, pp. 280, 283, 282—283, 285, 325.
  - (四) Fox, : *ibid.*, p. 252.
  - (五) Rivers, : *ibid.*, p. 114.
  - (六) Ivens, : *The Place of Vui and Tamate in the Religion of Mota*, *Journal of the Royal Anthropological Institute*, vol. 61, p. 158.
  - (七) Rivers, : *The History of Melanesian Society*, vol. 2, p. 406.
  - (八) Rivers, : *ibid.*, vol. 1, p. 23, 157, 163; vol. 2, p. 414.
  - (九) Codrington, : *ibid.*, p. 119.
  - (十) Ivens, : *The Diversity of Culture in Melanesia*, J. R. A. I. Vol. 64.
- 参見 Codrington, *ibid.*, p. 119 の参見の Rivers, *Psychology and Ethnology*, p. 114 の参見の参照せよ。

上來述べるところによつてリヴァーズやイヴェンスの如く、メラネシアのmanaをインドネシアの靈質と關係付けることは彼等の論據からは支持し得ぬことを明かにし得たと思ふ。既に云つた如く、吾々がこの二個の觀念を關係付け得るには、細部の類似は指いて、何よりも先づ夫々の本質的特徴に於て兩者の類似を示さねばならない。しかるにリヴァーズやイヴェンスはこの点の考究を遺してゐる。しかしそれは兎も角、例へばクロイトが靈質と見做したマレー人のスマンガート *sunungat* やバタク人のテンデイ *tendi* 乃至トンデイ *tondi* の如きは、時にmanaと同類と見られ、又マレットのやうに、カピ族間で生命力を表はすに用ゐられてゐるマングルをもmanaの類似觀念と見做してゐる者もある。このやうに従來聞々manaの類似觀念として指摘されるものの中には、實は靈質と見るべきものが含まれてゐるのみならず、往々にしてmanaそのものも生命原理乃至生命力であるとか、或は超自然的生命力を表はすとか云はれて來てゐる。而して他民族の事例やmanaの一般論は暫く措いて、メラネシアのmanaに限つて見ても、ニュー・ヘブリディズを探究したシュバイザーの如く、manaを普遍的生命力と見る人もある。もしこれが果してさうなら、この点からしてmanaを靈質と關係付けることも可能となるであらう。それで吾々は次にシュバイザーの見解を示して些かそれを論評しつゝこの問題の考察を進めよう。

シュバイザーは云ふ。「コドリントンがmanaをば特に大きなヤム芋の發生、ボートの快速、戰勝の如き並外れた行爲を成し遂げ得る力としてのみ表はす場合、余はこの觀念をば、それなくしては全く繁榮のあり得ぬ一の普遍的生命力の概念に敷衍したい。余には一般に生命のあるところ到处にmanaはあらねばならず、又manaは成長、發達、成功のあるところは何處にもあらねばならず、manaがなければ停止即ち死が生ぜねばならぬと思はれる。格別

の成功、並外れた行爲は多くのマナの作用に基き、萎縮や死滅はマナの欠乏の結果である。生きてゐる限りは何人にもマナがある。人が弱くて平凡であるとその者は殆どマナを持たず、人が多くのマナを持つとその者は名望家であつて凡ゆる企てに於て幸福を持つ。」と。<sup>(七)</sup>

固よりシュバイザーのマナ觀はこれを以て盡きてはゐないが、今は差當り必要な点のみを示すに止めておく。而してこれに對しては既にレーマンが簡單に「餘りに行き過ぎた抽象」との批評を加へたが、吾々も亦これに對して幾らか異論を挿む餘地があると思ふ。一体シュバイザーはコドリントンがマナを超自然的力として表はしたところを一の普遍的生命力の概念に敷衍したいと云つてゐるけれども、一見して明かな如く、それは單なる敷衍ではなくして別個のマナ觀の呈示と云ふべきである。コドリントンの見解からシュバイザーの如き見解を導き出すことは如何にしても困難である。シュバイザーも他の報道者達の様にコドリントンの名著「メラネシア人」によつて大なる示唆を與へられてはゐるが、彼自身は一九〇一—一九一二の二年間に亘つてニュー・ヘブリディズを訪れてゐるので、事實はその間に遂げた現地調査の結果に基いてコドリントンとは異つたマナ觀に到達したものと見るべきであらう。それで吾々はシュバイザーが現地に就いて探究した人であり、殊にコドリントンと幾らか見解を異にする点については自らかなりの自信を示してゐるのであるから、吾々は一應彼の見解を尊重すべきであらう。<sup>(七)</sup>

かくて吾々がシュバイザーの述べるところをそのまま是認するとしても、それは他の現地研究者達が報じたメラネシアの他の地域に見るマナの觀念とは著しい相違がある。コドリントンを始め、その後部分的ながらメラネシア諸島に就いて現地調査を行つた人々の報道に徴すると、マナは人間は固より動植物や無生の事物に至るまで特殊の

ものに歸せられると云ふのが一般である。それでシュバイザーの云ふが如く、一般に生命のあるところは何處にもマナがあらねばならぬとか、人は生きてゐる限り何人もマナを持つとか云ふことをそのまま認めるとしても、それは吾々の知る限りではニュー・ヘブリディズにのみ限られ、メラネシアの他の廣い地域の事例よりすればむしろ特殊の場合と云ふが至當である。この点は又シュバイザーがマナがなければ死が生ぜねばならぬと云ふことにも當當る。こゝに云ふ死が肉体的生命の喪失を意味するなら、マナの喪失によつて同時に生命の喪失を來すと云ふことは、少くも吾々の見る範圍内の他の現地研究者の報道に於て見ることが出來ない。

又シュバイザーが格別の成功、並外れた行爲は多くのマナの作用に基くとか、多くのマナを持つた者は凡ゆる企てに於て幸福を持つ名望家であるとか云ふことはそれ限りでは他の報道者達の見るところと略々一致してゐる。しかしその場合のマナはユドリントンとホグピンが一致して認めるところによると、その人に固有の方ではなく、その人と密接な關係を保つと信じられてゐる死靈が精靈かによつて與へられる力である。一般のメラネシア人の信念によれば、人の顯著な成功や繁榮は究意人格的存在がその人に與へるマナの恩恵によつて齎らされる。

かくの如く見て來ると、吾々がシュバイザーの見解を尊重するにしても、それは彼が探究したニュー・ヘブリディズに關してのみ妥當すると見るべきであらう。しかしながら吾々はシュバイザーの見解がニュー・ヘブリディズだけに就いても果してどの程度正鵠を射てゐるか、些か疑問なきを得ない。何となれば先づシュバイザーの述べるところは現地研究者の陳述としては精確を欠いてゐるからである。即ち叙上の所論に於て見る通り、「ねばならぬと思はれる」と云ふが如き表現は土着民の信念上の事實の忠實な表明とは見難いであらう。それはシュバイザー

の思辨の結果とは云はないまでも、むしろそれには彼が受けた單なる印象が織込まれてゐると云ふべきではなからうか。事實シュバイザーは他の箇所で、「余はむしろマナが凡てのものに現はれ得るとの印象を持つてゐる」とも云つてゐる。(C)

しかも吾々がシュバイザーの叙述を仔細に検討すると、それは必ずしも透徹したものと云ひ得ないのみならず、又幾らか矛盾と見られるものに逢着する。抑々シュバイザーがマナを以て一の普遍的生命力となしたことは如何なる意味に於てであらうか。彼自身の説明は上に示した範圍を出でず、至つて簡略ではあるけれども、その眞意を汲むに、生命力と云ふ一の普遍的勢力があつて、これが凡てのものに分有されてゐると見てゐるらしい。而してその根據に就いては特に指摘してもゐないが、それはマナが凡ゆる事物に自由に顯現し得ると見ることに基いてゐるらしい。しかし假令それを認めるとしても、そのこと自体はマナの汎神論的解釋によつてのみ説明さるべき必然性を持つてゐるとは云へないであらう。又シュバイザーがマナを生命力となすこと自体がどの程度正しいか。成る程マナが一般に生命のあるところ何處にもあらねばならず、マナがなければ死が生ぜねばならぬと云ふことはマナの生命力たることを思はせはする。けれどもシュバイザー自身が擧げたものだけに云つても、マナは呪文やポトの如き生命のないものにも現はれて、單なる生命力と云ふ以上に廣い作用面を持つてゐる。況んやシュバイザーはマナが凡てのものに現はれ得るとも見ようとしてゐるが、メラネシア人が凡てのものを生けるものと見てゐると云ふことは出來ず、シュバイザー自身も恐らくさう云ふ程の自信はなからう。それ故彼自身一部特殊のものを抽象してそのマナ觀を構成したとも見られ、結局それによつてマナの全豹を明かにし得てはゐないと云ふべきではな

らうか。

のみならず今も云ふ通り、シュパイザーはマナが凡てのものに現はれ得ると見ようとし、或はマナは一般に生命のあるところは何處にもあらねばならぬと云つてゐるけれども、彼自身の説明はマナが特殊のものに現はれることを示してゐはすまいか。何となればシュパイザーはマナを以て、それなしには全く繁榮のあり得ぬ生命力としたが、しかし實際には土着民に於ても凡てのもの、一般に生命のあるものが繁榮の當体たり得る譯ではなく、それはある一部のものに限られるであらう。さればかゝるマナの定義よりすれば、結局マナは自ら特殊のものに限つて認められることになりはすまいか。コドリントンが北部ニュー・ヘブリデイスに就いて報じてゐるものについて見ると、人間は固より動物、石、武器等でマナの認められてゐるものは何れも特殊のものと云ふことになつてゐる。而してこの点に關して吾々はこれまで述べるところによつてもシュパイザーの見るところがコドリントンの見るところを置き得るほど有力なものとはし難く、又コドリントンのこの点の觀察を強ひて排除すべき他の確たる理由を持たな<sup>Chp</sup>。

なほ又シュパイザーは弱くて平凡の者は殆どマナを持たないと云つてゐるが、他方で彼が云ふが如くマナが生命力で、その欠乏が死を生ずるものであるならば、大部分の土着民がつねに生命維持の危い状態に於て生活してゐることになりはすまいか。この点に於てもシュパイザーの叙述は理解の徹底しないものを殘してゐる。

以上の如く見て來ると、シュパイザーがマナを生命力と見ることに就いては幾多の難点があつて、吾々は遽かにその説に左袒することが出来ない。従つてこの方面からマナと靈質との關係を認めようとすることも煩る困難と云

ふことになるであらう。

要之、吾々が一般のメラネシア人のマナの信念をインドネシア人の靈質の信念と比べて見る場合、フォックスを始めリヴァーズやイヴェンスが氣付いた如く、その間に幾らか共通の要素があるにせよ、<sup>(11)</sup>兩者は本質的に異つた様相を示してゐると云へる。靈質は諸存在一般に宿る生命原理であつて、そのもの体よりの一時的か永久的かの分離は疾病や死を將來するものとされる。しかるにマナは元來かくも廣汎な存在には認められず、その顯現は特殊の存在に集中してゐる。のみならずマナは死靈や精靈がある存在と關係することによつてその存在に歸せられると見られるのが一般であると共に、それは自ら宿る存在を生氣付ける原理とは見られず、従つて又マナの喪失は毫も死を將來しはしな<sup>(12)</sup>。吾々がマナと靈質とのかゝる本質的相違を顧慮するならば、むしろ兩者を異つた範疇に屬せしめるが至當であつて、これを關係付けんと試みの違かに支持し得ぬ所以が明かとなるであらう。

(1) Kruif, : *Ibid.*, pp. 222—223.

(11) Söderblom, : a. a. O., s. 51.

(12) Marett, : *Mana*, in *ERE*, vol. 8, p. 373.

(13) Crawley, E. : *The Tree of Life*, 1905, pp. 229—234.

Lehmann, R. : *Mana*, 1922, s. 126.

(14) Speiser, F. : *Ethnographische Materialien aus den Neuen Hebriden und den Banksinseln*, 1923, s. 44.

(15) Lehmann, R. : *Die Religionen Australiens und der Südsee* 1911—1930, *Archiv für Religionswissen-*

schaff, Bd. 29, 1931, s. 169.

(七) Speiser, : a. a. O., s. 342.

(八) これを人に就いて見ると、メラネシアで酋長職の認められるところでは、酋長はマナを持つと信じられてゐる。しかし酋長として老齢による弱さや失敗等が原因でそのマナが信じられなくなる。而してかゝるマナ喪失の結果は酋長としての権勢の喪失に止まつて、その人に死が来るのではない。

(九) Codrington, ; *ibid*, p. 130. ; Hogbin, H. I. : *Mana, Oceania*, 6, 1936.

(10) Speiser, : a. a. O., s. 343.

(11) Codrington, : *ibid*, pp. 56, 183, 185, 309. ; *Melanesians*, in *ERE*, vol. 8, p. 533.

(12) 固より本来特殊のものに歸せられるマナが他に傳播することはあるが、それとこれとは同列に語ることは出来ない。

(13) フォックスはマナ乃至メナが語源的に氣息を表はすポリネシア語のマナワ *manawa* と關係あるものと見て、マナは恐らくもとは氣息を意味するであらうとしてゐる (Fox, *ibid*, pp. 100, 231.)。そしてインドネシアで氣息は靈質の顯現と見られてゐるので、この点でもマナと靈質との類似を認めてゐるらしい。かくの如きマナとマナワとの間の語源的關係については既にヴェルが指摘したところであるけれども (Rühr, J.: *Das Wesen des Mana*, *Anthropos*, 14—15, 1919—1920, s. 113.) これは決して確立されたものではなく、レーマンやアルマンの如きはこれを疑つてゐる (Lehmann, R. *Mana*, 1922, s. 5. ; Arhman, E.: *Seele und Mana*, *Archiv für Religionswissenschaft*, Bd. 29, ss. 329—335)。

(14) なほマレットはポリネシアに於てマナが心臓や腹だけでなく「内部の人」及び凡てその中に含まれる欲望、愛、願望、感情は固より、なほ思想信念を表はし、ある意味では意識や靈魂をさく表はすと云ふ (Maret, *Mana*, *ERE*, vol. 8, pp. 276—277.)。もしこれが認められるならば、人間のマナは大體心理作用を表はすと見られ、靈質が大體生理作用を表はすのとは趣を異にしてゐると云へるであらう。